In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	高野山女中案内
Author	阪口, 弘之
Citation	人文研究. 50 巻 10 号, p.703-720.
Issue Date	1998-12
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学部
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

Osaka Metropolitan University

人文研究　大阪市立大学文学部紀要
第五十巻　第十分冊　一九九八年十二月

高野山女中案内（紹介と翻刻）

阪口弘之

慶応大学に享保期の絵入狂言本が相当数所蔵されている。元禄歌舞伎と宝暦歌舞伎のはざまにあって、やや等閑視されがちであったこの時代の歌舞伎については、近年ようやく活発な発言をみるようになり、徐々にその具体的様相が明らかになりつつある。ここに翻刻紹介する『高野山女中案内』は、これまで作品名は知られていたものの、原本所在の確認に至らなかったものである。高野辰之氏が「歌舞伎狂言本解題」（『演劇史研究Ⅲ』昭和八年）に、「正本を一見しただけで詳細を知らない」と断わって、その書名のみを挙げた多くの絵入狂言本が、慶応義塾図書館に残ることが知られなかったことによる。したがって、これら慶応本の紹介は、享保歌舞伎研究の進展に大いに寄与するものと信じるが、詳しくは別の機会が心づもりされており、本稿では、その中の一本を紹介することにする。なお、翻刻方針は、古典文庫『上方狂言本』シリーズに概ね従うことにした。紹介を許可された慶応義塾図書館に御礼を申し上げる。

高野山女中案内　慶応義塾図書館蔵

書誌

〔体裁〕半紙本。袋綴。一冊。
〔表紙〕原表紙、黄土色無地。二一・五×一五・八。
〔題簽〕原題簽、表紙左肩貼付、四周双辺、一六・七×四・八。なお、表紙中央やや上部に原方簽貼付。膚色無地、四周双辺、七・八×六・三。
〔見返し〕題名並び書、役人替名付。
〔内題〕上　高野山女中案内（かうやさんぢよちうあんない）座本沢村長十郎大当り。
〔字高〕二〇・〇。
〔丁数〕見返し半丁、本文六丁半。
〔行数〕十二行。
〔板心〕□（かうや山）□（見返し）、かうや山　三……
かうや山　五－かうや山六ノ十－かうや山十一－

かうや山十二。なお、終丁は、上部に「かるかや」とあり、下部に丁付（不明）。

〔挿絵〕 見開二図（一ウ―二オ、五ウ―六オ）、片面一図（七オ）。最後の片面図は、貞享頃の説経正本「かるかや」に同じ。ただし、その元版の覆刻図と想定される。

〔刊記〕 本文終りに「八もんじや 八左衛門板」。

〔備考〕 享保六年正月、京、都万太夫座（座本沢村長十郎）上演。三番続。作者さど嶋三郎左衛門。

立役　片山小左衛門
立役　染ノ井半四郎
名　(紋)　太夫　山本かもん
万大夫　座本　沢村長十郎
代　太夫　山下かめの丞
(紋)　立役　山村哥左衛門
実悪　宮崎義平太

長十郎　(絵)
大当り　(絵)
□□[もんカ]

かうやさん
高野山女中案内
うき世の夢はあけがたの石枕

ふ屋町通
八文字屋
八左衛門

并ニ　みめうの橋わたりあふせた
おんあひのちぎり

高野山女中案内

付リ　親子夫婦紅のかや浮世の夢は
あけがたの石枕

上つくしの殿作リまぼろしの色諍
中紙屋の宿泊義ニなびく花すゝき
下八葉の御山九ほんのうてな

かうやさんは女人けつかいの御山
女人堂よりおくへ入事かなはず
此度壱町を壱寸ニつもり
御山のきうせき残らずうつし
女中の為御目ニかけ申候

山の大ゑづ外ニ有

（見返し・上段）

一加藤左衛門しげ氏　立役　山村□門
一みだい花松御前　大夫　山本かもん

一若殿石どう丸　沢村林之介
一みだい妹待よひ姫　上村吉三郎
一あふよ 浅尾つね松　一村雨 松山大吉
一小性右門 菊川わだ五郎　一小性一かく 浅尾久丞
一しげ氏弟まつらの介　敵役 宮崎義平太
一くは原あそ右衛門　吉岡三郎介
一家老しがの丞　立役 片山小左衛門
一女ばうたまな　清崎半太夫
一いもとすさき　坂東富之介
一わだ介 中村嘉七　一かく介 榊山介五郎
一家老文蔵　立役 染ノ井半四郎
一女房たがは おのへ菊三郎　一いもと通ひぢ たき井万大夫
一たくま藤九郎　藤田九八郎
一しづま子おきの丞 沢村みね五郎　一うらの介 よし沢竹五郎
一しげ氏てかけみかさ　若女 大和川辰弥
一兄数矢小十郎　沢村政五郎（見返し・中段）
一内せんむすめ ちさと姫　山本哥丞
一家老伴内　勝山介十郎

一代官松左衛門　敵役 丞本友十郎
一いもとおまき　菊川京之介
一母親せいじゅ　為川小兵衛
一松左衛門女房おりく　若女 霧波尾上
一お吉 山本つる太郎　一おぎん 山村おとの介
一おげん 菊川しのぶ　一権之介 山本くもゐ
一下男五平次　道外 玉川源三郎
一侍甚六 桐山惣七　一侍太右衛門 富永庄五郎
一町人孫兵へ 岩井忠七　一同彦介 中村喜八
一ひにん清蔵 今村源八　一ひにんごん九郎 川嶋彦左衛門
一ちご丞丸 おのへうこん　一ちごきよ丸 瀧井かづま
一玉や与大夫 浅尾伝十郎　一同女房 藤嶋長左衛門
一与次娘おはる 坂東豊三郎　一同弟与四郎 さど嶋市十郎
一与次女房おたか　大夫 山下かめの丞
一紙や宿玉屋与次　座本 沢村長十郎
一狂言作者　さど嶋三郎左衛門
（見返し・下段）

上 高野山女中案内

座本 沢村長十郎大当り

九州はこざきの明神のはいでんに。まく打まはし、ことしやみせん。しげ氏公の手かけみかさ。ぬりがさにて人めをしのび。まくのかげへ入にける。

ふかあみがさの侍来り。まくの内をのぞけば。小性右門、一かく、つつと出。是侍、女中のまくをなぜのぞくとしかれば。へんとうもせず、かしこへ行。

所へ、しげ氏公、のり物より出給へば。みだい花松ごぜん、まくより出。殿様御病気御本ふく有。明神様へ御礼参、おめでたいとの給ふ所へ。

さいぜんの侍来り。かさぬげば。家老しがの丞。それにゐるは、殿様よりおひまの出た。お手かけみかさ。帰らぬと身が引立るが。みだい聞。殿ノ御病気聞。お姿おがみたいと有ゆへ、おれがよびよせた。左様でない。みかさはしつとふかい女。おそばに置て、お為ニならぬとおつ立れば。うらめしさふニ立さりける。

しげ氏、しがの丞をそばへよび。刀のさや打ニし。身がごんぜつがまはらぬゆへ、主を云こめる。いや、あやまりと思召は、お手打になされと云を。あそ右衛門、右門、一かく。先御立なされと。しがの丞をかしこへつれて入にける。

しげ氏は。みかさは帰つたかとの給へば。いや、こゝにゐますとまくより出。みだいにしつとのうらみ。しげ氏は、あゝあさましや。ほつ心とぐると、たぶさ切給ふを。しかの丞、かけ付とめれば。扇でもみぢばヲふきちらし、」

（一オ）

〔挿絵　第一図〕（一ウ）

〔挿絵　第二図〕（二オ）

第一図　（上段）

『みだいの□まつよひ』

〔かもん　大でけ〕

『しげ氏のみだい所』

『てかけみかさうらみ云』

〔辰弥　大でけ〕

（下段）

〔かつ山　大でけ〕

『ししや伴内手へきず付る』

『しがの丞見てゐる』

〔片山大当り〕

『源蔵ころされ』

『しげうぢほっしん』
〔片山大当り〕
『しがの丞とゞめる』

第二図　（上段）

『みだいまき物うけ取』
『しがの丞書置よむ』
〔片山　大でけ〕
『わだ介さいご』
〔義平太　大でけ〕
『まつらの介いはいを切』
〔染ノ井　大でけ〕
『文蔵ふしんを立る』
『しがの丞が女房』
『あそ右衛門ついはうニあふ』

（下段）

『手かけみかさ』
『みだいやうす聞給ふ』
『若君石どう丸』
『おぢまつらの介聞いる』
『うらの介せりあふ』
『しづま子おきの丞』
『文蔵刀ぬかんとする』
〔染の井　片山　大当り〕
『しがの丞手きずみる』
『ししや伴内せんぎ』
『藤九郎聞ゐる』

花もみぢ、むじやうの嵐時をまたぬと。ふり切出給ふと思ふは夢さめ。みだいは、なふ殿様とはしり出給ふ。所へ、しがの丞が女房たまな、御前へ上り。是は何となされました。されば、しげ氏様こくゑんなされた事を夢ニ見たと。の給ふ所へ、

みかさ、わたぼうしき。兄小十郎諸共ぬき刀。しげ氏ノ弟まつらの介、やり引さげおつかけ来り。こいつらが、みだい石どう丸にうらみ有と云。みかさは、是御みだい様。殿のこくゑん、私ゆへと。女ニ云付、私が母をころさし給ふ。兄弟帰つたれば。其女、わたぼうしで顔かくし。うらのかきやぶつてにげし。おつかけしニ、行ゑ見うしなふた。母の敵ゆへ、討ニ来た。みだい聞。覚ないぞ、大殿様ニ一生あはず、石どう丸を世ニ立ん法も有。みかさ聞。其御せいごんなれば、おまへではない。たまな聞。是は、家中の内に。みだい様石どう丸様をころし、国取んと思へ共。手おろしては、せんぎニなれば。母ころさし、あの衆ニうたさんたくみじや。まつらの介聞。さふじや、其悪人方めを。身がせんぎし、うたしてやら

ふ。

みだいは、殿御ひさうのもみぢがちつた。取のけよ。中げんわだ介、畏つて持て立を。みかさ、わたぼうし顔へきせ。母様ころしたは、こいつじや。さいぜんよりにた顔と思へ共、男也。今わたきせみればちがはぬ。まつらの介ふみ付。こいつはしがの丞が中げん、はくじやうせよ。成程、主人しがの丞が申付でござると云を。兄弟、母の敵と切ふせる。はてころすまい物。もみぢのだいの中より、書置出。是は、殿の御手じや。何々、しがの丞が我にちんどくあたへしゆへ。三日せつじしぬれ共。こう法大しの御むさう請、へいゆうす。それゆへ、出家とぐる。しがの丞を討。石どう丸、世ニ立べし。一家中へ、」

(二ウ)

しげ氏判。たまな聞。おつとの悪、夢ニも存ぜぬ。私、だまし討て参らふとはせ帰れば。みだいは、みかさ兄弟つれ。皆、をくへ入給ふ所へ、

しがの丞、中げん角介つれ。まつら殿がみかさをおつかけ。御門内へ入給ふと云か。後ニ身が尋る時、出て申せと。角介かへし、しあんの所へ、

たまなが兄文蔵来り。妹が急ニよびにおこしたゆへきた。夜も八つ過、そなた、何しに来たと云。

所へ、たまな来り。なふ殿の書置しれたと云ば、しがの丞は、なむさん、それをしつたか。おゝどうてんのはづと。文蔵ニ一々云ば。殿様の敵と、両人切付る。しがの丞は、やれまてと云共、切付れば。ぜひなく切合所へ。

まつらの介は。あそ右衛門、みかさ兄弟。一家中諸共、しがの丞のがすなと取まく。みだいは、長刀引さげ、まてく。しがの丞ニかぎり、悪心あらふと思はぬ。殿御出国、十年以前。もみぢだいの土の中より出し書置なれば。土にて紙くさるはづじや。しがの丞聞。私が書置と申は。殿様、直ニお渡しなされ。外ニしる物ないに。女房がしれたと申たゆへ、けでんした。是ごらんなされ。みだい見。成程、殿の御筆。みかさがしつとニて出るでない。けいぼ、某をころし。じつしまつらの介ニ世をつかせんと有。我出行跡にて。石どう丸十五才ニならは、世つぎとなし。まつらの介うしろ見とし、国おさめよ。

さあれば、母の悪心もなく。家おさまるとノ書置。まつらの介聞。いや、みだいのしはざニして、みかさが母ころした悪。たくみでないか。それは、わだ介をこなたが頼んだ。兄のかく介、有やうニ云たと。角介よび、さいぜん申た通。まつら殿ニ極つたか。成程、左様と云ば、かく介かへし。なんとく。ゑゝ下らうゆへあらはれし。其書置は、そこなあそ右衛門がにせ筆と云れた。おのれ云たか。いや、申ませぬ。ゑゝ皆あらはれたと。いはい持出。身が母のいはいじや、」（三オ）

しなるゝまつごニ。此国を汝つげとのゆいごんを立、悪をしたと。いはいを刀で付通し。大小なげ出し、さあくびうて、文蔵うたんと立よるを。みだいとゞめ。ほつきし、善心ニならせ給へば。殿の御書置の通。石どう丸が後見に頼ます。しかの丞は。かく介はそなたやしきへ入しを見付たを。わだ介が兄にして云たれば、悪しれた。あそ右衛門も云まげた。悪ニ一み、ついはうとおつはらひ。皆、をくへぞ入給ふ。

しがの丞はほうかふり、顔かくし。夜明ざるニやしきのへん見廻る。

所ニ、高へいの矢ざまより。巻物持し手、ぬつとさし出す。下にふしたる男。こものけ。かの巻物請取のくを。しがの丞、後より切ふせ。巻物くはい中し。しがいにこもきせる所へ。

てうちん人かげみゆれば。かしこへかくれゐる。所へ、中つか伴内ししや役。まだ夜ふかで、大門あかぬと。はさん箱にこしかけゐる。

所へ、又、巻物を持手をぬつと出す。伴内、巻物取、ふところへ入。小刀で其出し手へきず付れば。手を引所ニ、夜明。大門ひらけば、皆、内へ入ける。

ながとの国内膳様より御ししやと有ば。まつらの介、石どう丸、みだい。同妹待よひ、こしもと引つれ出給へば。しがの丞、文蔵、藤九郎、上下あらため出る。ししや伴内、御前へ出。主人内膳申こしますは。手前娘ちさと姫義。石どう丸様こいむこにし。御こし入ニと存れば。しげ氏様出国にて、かれ是延引仕る。日げん御極め下さるべしと云。まつら聞。先立て、此方よりししやつかはし

た。やうす、かへつて聞れよ。しがの丞、文蔵聞。私らは存ぜぬ。みだい聞。皆、相談はなかつたか。此十五日ニ極め。申つかはされたとの給ふ所へ。

小性おきの丞、はちまきにもゝだちし。私おやしづま、何物にか討れ罷有。御せんぎ有、敵討し下さるべしと云。文蔵が女房」（三ウ）

田川はせ来り。なふおまへの兄源蔵様。大手口ニころされてござると云。小性うらの介。宝蔵あきて有と云。しがの丞聞。へいのまどより、ぬつと出しを。取たもしれまいと、あてこと云ば。伴内、けいづ是ニ有と、巻物上。せうこニ、手へきず付置しと云ば。しづましがい引出し、きず有。いや、是はしんで跡に付たきずと。刀ぬいて、是のりはないぞ。しがの丞刀見たい。文蔵、つか持ぬかんとす。しがの丞ぬかさず、こりや文蔵が手ニ小刀きず。しづまはそちがころした。おゝ此間、しづま、よな〳〵宝蔵へ入。うつし物すると聞つけて、ころし。けいづを、兄源蔵ニわたすはづを。手へきず付しゆへ、事あらはれてはと。しづま手へきず付置たと云ば。しがの丞聞。先に巻物出したゆへ。ころして取たが、源蔵で有たよな。おぢまつら殿、ししやニは。石どう丸らい病ゆへ。姫とゑん切とノにせししや。則、某、とらへ置しと。清蔵平蔵二人になはかけ、出せば。伴内聞。皆、お主ニ忠臣。敵と云は、まつらの介じやと云ば。文蔵もおきの丞も聞とゞけて。しがの丞殿にも、いしゆはない。とかく、姫君の御こし入給へ。まつらの介は家出らるゝであらふと云ば。なんの身が出ん。一家中は皆、一みをさせ置たと取まけば。皆、ぬきつれ切合。みだいは、若君諸共おち給ふ。人々は切ぬけ。跡をしたひ行にける

中

代官松左衛門の妹おまきは。こしもとつれ出給ふ所へ。御出入玉や与次が女房おたか来り。けふはまつり、お客がござりませふ。お手つだいに参りましたと云所へ。あほう五平次もどり。おはぐろつぼかうて参りましたと。一斤入の茶つほ。是は大きな物。せつ用集の本かふておじやつたか。是と出すをみれば、大ざつしよ。是は。相

性みる本じや。追付おまき様よめ入。相性みるニ入と云」（四オ）

所へ、

玉や与次、内ニ入。けふは、だんな様御使に行。小袖も御かしなされた。おまきは、与次に心有ゆへ。女房のめをしのび、相性を見てもらふ。

所へ、しがの丞、文蔵、此所へ来り、あんないこへば。五平次出れば。我々はちくしうの者。松左衛門様へ御めニかゝり度と云ば。内へ入、侍二人、だんな様にあひたい。ちくしやうじやと云ます。松左衛門女房おりく出。だんな殿他行といへ。面へ出、だんなたこくじやと云は。お内義様お手代衆ニあいたいと云へば。かくと内へ云ば。内義は。与次殿、手代に成てあふて下され。心へましたと。女房やおまき、をくへ入レる。

両人、内へ立入。はかた弥平次殿より、御状もらふて参つた。用事ござれば。此紙やの宿ニ、二三ケ月借宅仕りたいと有ば。おやすい事、代官の義なれば。どこ成共申付ませふと云所へ。

与次が女房、茶持出。しがの丞顔を見。はつと云、入らんとするを。そちは身が妹めか。にくいやつの。いたつら男と、やしきをぬけ出た。伊介と云、やつが顔はしらぬ。ゑん組やくそく斗で。たのみを取なんだゆへ、事はすんだが。ふとゞき女めと、さんゞくたゝけば。与次をしのけ。伊介と云は拙者。ぬしない女つれのくは、世上のならひ。文蔵申は。此度、お国みだれ。みだい若君行ゑしれぬ。此所お通有はづ。おかくまい申さば。我々、かうべさげ、うやまふニ。やくに立ずと云ば。与次は、其御両人、私方ニかくまい置しと云。それは誠か、でかされた。かうべがまだ高いと。あたまさげさせ、妹が義、御めんと云ば。仰迄もなし、むこでござる。扨一時もはやく、御たいめん申たい。与次聞。此所のまつり。松左衛門様にあふて、返事申帰らふ。むかふへ四五町ござつて。角より三けんめ。玉が書てござりますぞ。心へたと、両人は悦び、かしこへ行にける。

与次は、内義ニ、此事さたなしに頼むと云。

所へ、松左衛門は、母せいじゆ諸共立帰り、」（四ウ）

内へ入。内義をさんぐしかる。母聞。松左衛門がむり斗云。よめ、をくへおじやと、つれて入。
与次は。下村へ御口上申て参りました。今日は御はら立られますなと。なだめて、かしこへ入。
おたか、をくより出ル。松左衛門は、銀包ほり出し。女房共へむしん云ずと。おれになぜ云ぬ。せんど弐百匁。今三百匁、そちニやる。なんでもきく替りに。おれが云事聞てたもとぬれかゝる。私には、与次と云男有。おく様へ聞へませふ。いや、女房はさつて。そちを持と取付ば。こゑ立んとするを。かゝへ帯を口へあて。しばりて、こやへ入、かけがねし置。
与次は、内義諸共出。先程の事。松左衛門様ニ云まいぞ。しるゝと命がないと云を。松左衛門、後ニ聞。不義物めと引すへる。内義は、いや、不義とは覚ないと。云んとし給へば。与次は、それおつしやつては、命がないと云。所へ、まつり客人の侍立入。松左衛門は、硯紙取出し。お内義と不義いたし候、御かんにんの上は。一生そいはてませふ、与次と書。判せい。女房おたかニ、いとまの状をかけと。客の侍一どニ刀ぬき、取まけば。とかく命有ば、云はけがなると、書て渡せば。松左衛門請取。かしたる小袖はいで取。客の侍打つれ、内へ入。
与次いなんとするを。内義引とめ、ふぎでない、云はけしやとはなさねば。口へ手拭、帯でしばり。主のなんぎ、心もとないと。こやへ入、女房がなはとき。夫婦、我やへはせ帰る。
しがの丞、文蔵、玉やを尋来れば。となりの人出。玉やの衆は夜ぬけし。あき家じやと云。是はしたり。みだい石どう様はどこへぞと云を聞。お尋者じやと、大ぜい取まけば。両人、切はらひ行跡へ。
与次夫婦、内へ帰り。扨は尋ニ廻つたを聞、親仁が、皆お供しのかれたさふなと。跡したひ行。
野中ニかやつり、休ゐ給ふを見付悦べば。みだいは。とかく石どう丸を山へつれ上り。父上尋」(五オ)

〔挿絵　第三図〕(五ウ)

〔挿絵　第四図〕(六オ)

第三図　（上段）

『松左衛門いもとおまき』

『松左衛門女房おりく』

〔かめの丞大でけ〕

『与次女房兄ニあふ』

『しがの丞てうちやくす』

〔片山　大当り〕

『あほう五平次』

〔玉川　大でけ〕

『玉や与次やうす聞所』

〔長十郎　大あたり〕

『文蔵聞てゐる』

（下段）

『こつじき共石で打ころす』

『与次が二おやたゝきころさるゝ』

『みだい与次が二人の子かこい』

『あそ右衛門こつじきと成』

〔三郎介　大でけ〕

〔皆々　大でけ〕

〔ねぢ岩〕

『ふどうまつらの介付ころす』

『云名付ノちさと姫』

『しがの丞御供申来る』

『文蔵みめうのはし渡ル』

第四図　（上段）

『松左衛門一札書といふ』

『与次なんぎ一札書所』

『松左衛門女房不義ノなんぎ』

『客の侍取まはす』

（下段）

『しげ氏道心なのらぬ』

『石とう丸尋給ふ』

『玉や与次みだいのこつ出す』

『天ぐ松左衛門を引さく』

『じや柳あらはるゝ』

合てたも。与次畏り、お供申行跡にて。是は守リ取落せしと有ば。女房おたか請取。追付渡し参らんと、持はしり行。

夜ふけ、まどろみ給ふ。こつじき七八人、川原ニてばくちうつ。みだいねごとのこゑニ。与大夫めさまし。金はくびニかけてゐますと云を聞。此金取らんと、ひにん一みし。ばたくと、与大夫ふうふかやより引出し。ごろた石であたま打くだき、ころす。みだいは、与次が二人の子を両はきにかこい。何成共やらふ、命たすけてくれ。我も大名しげ氏公のみだいと有ば。ひにんの頭（かしら）。我こそあそ右衛門よ。そちゆへついはうで此姿。思ひしれとしめころす。二人の子も打ころし。金さいふわけんと云。

所へ、てうちんみへれば。皆、かやへかくるゝ。
与次は、石どう様は山へをしへ。みだい様野ニ置て、気遣さニ。帰る道で、そちにあふたと云を。こつじき共、ばたくと取付。与次みれば。みだい初め、父母子共ころされしていを見。きもつぶし、切ちらせば。ばらくとにげさる。あそ右衛門をとらへ。石にてつら打はれば。あゝいたく。此やうニして、みだい様父母子共をころしたかと。なぶりころし、とゞめさし。なくくしがいかたづけ、其後、山へ上りける

下

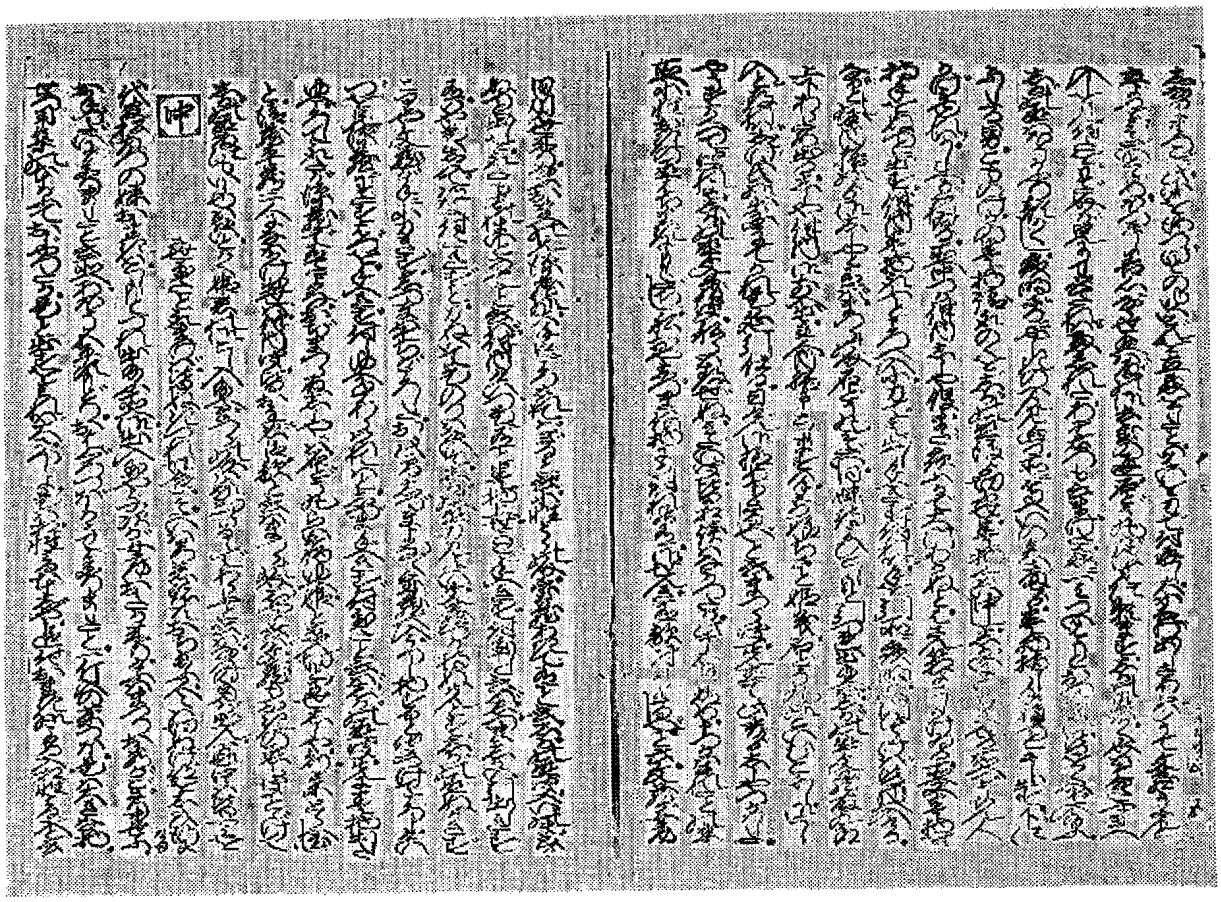
石どう丸は、山へ上り給ふ。親子のゑんとて、しげ氏道心ニ行あひ。一々云て尋給へば。扨は五つでわかれし石どう丸。はつと思ひ、其道心は我らと相でしと。あらぬせきたうをしへ給ふ。
所へ、与次来り。母ごのこつ取出し。有しやうす、涙と共ニ申せば。いや、母様は、あのあんに念仏申てござる。みれば、五りんのかげうつる。扨は一念来りしとの給ふ

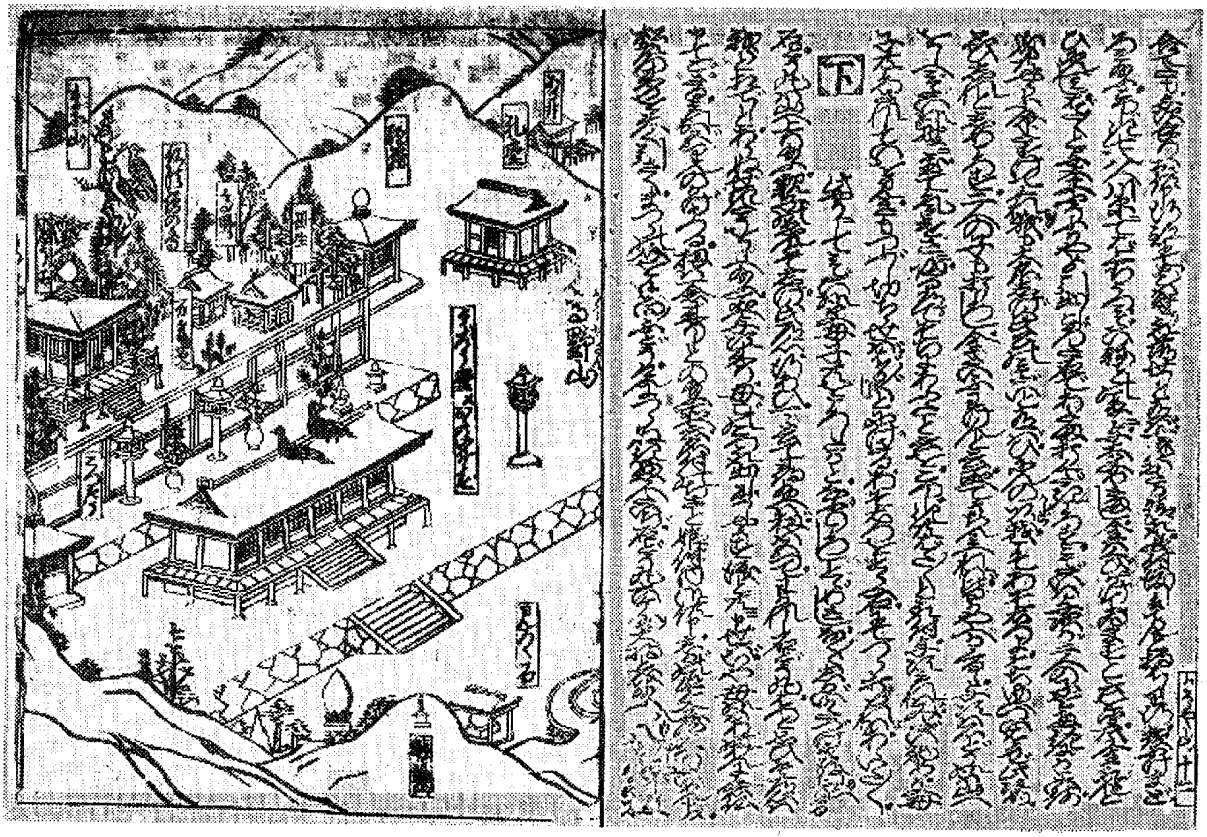
所へ。
云名付のちさと姫、伴内御供申。しがの丞、文蔵来り、たいめん申ス。松左衛門来るを、天く引さく。まつらの介を、手向ノふどう。けんにつらぬき、悪人たいぢ。石どう丸、六ケ国ノ大将と成給ふ

八左衛門板（八もんじや）（六ウ）

（挿絵　第五図）（七オ）

第五図
（高野山）
『みろく石』
『転軸山』
『あか井』
『孔堂』
『経蔵』
『とうろう堂又おくのいんからす』
『こったう』
『丹生』
『高野』
『万年草』
『仏法僧の鳥』
『御べう所』
『まに山』





〔追記〕

本稿で紹介した『高野山女中案内』の他に、慶應義塾図書館に所蔵される享保期（一部に正徳期を含む）の絵入狂言本は次の通りである。

(1) **呉越忠孝開分の花**　作者さと嶋三郎左衛門

半紙本一冊。原表紙カ、黄土色無地。二一・七×一五・八。題簽欠。本文十二行八丁、他に見返しに出版広告と役人替名。初丁表裏に「木屋七太夫直伝」の「みちゆき」本文（他に浄瑠璃出勤「木や今太夫」）。正徳四年京万太夫座興行。五番続。ゑしまや市郎左衛門板。

(2) **烏帽子宝万石要**　作者さか木山かん介　さど嶋三郎左衛門

□十郎（人物）（人物）	ゑぼし宝まんごくのかなめ 万　石　要 □翁の□の大ぐはんの顔見せ	ふ屋町通 八文字屋 八左衛門

半紙本一冊。原表紙、黄土色無地。二一・九×一五・六。原題簽、表紙左肩に貼付（右図）。一五・三×四・五。本文十二行七丁、他に見返しに出版広告、初丁表に役人替名。

享保元年京万太夫座顔見世興行。三番続。八文字屋八左衛門板。

(3) **初日西国**　**けいせい市杵嶋**

西国	けいせい市杵嶋　初日

半紙本一冊。原表紙、青地布目模様。二一・七×一五・五。原題簽、表紙中央に貼付（右図）。一五・八×三・二。本文十二行八丁半、他に一丁役人替名。終丁表本文末に「口上云此次は後日ノ狂言へ」持出して仕りまする」とある。

享保二年京万太夫座二の替り興行。次項の「後日

西国 けいせい犬嚼塚」と五日替りに上演。三番続。八もんじや八左衛門板。

(4) **後日西国 けいせい犬嚼塚**

西国	けいせい犬嚼塚	後日

半紙本一冊。原表紙、青色布目模様。二一・六×一五・五。原題簽、表紙中央に貼付（右図）。一五・九×三・二。本文十二行八丁半。

「初日西国けいせい市杵嶋」と五日替りに上演。内題下に「二の替小佐川音羽大々あたり」とある。三番続。八もんじや八左衛門板。

(5) **滋賀都鏐之花園**　作者中山金蔵　安達三郎左衛門

半紙本一冊。替表紙カ、青味がかった黄色無地。二一・五×一五・八。題簽欠。本文十二行六丁、他に見返しに出版広告、初丁表に役人替名。

享保三年京蛭子屋座顔見世興行。内題下に「大和山座大あたり」とある。三番続。ゑじま屋市郎左衛門板。

(6) **猩々酒屋万年蔵**　作者さど嶋三郎左衛門

半紙本一冊。原表紙、黄色無地。二一・六×一五・八。題簽欠。本文十二行六丁半、他に見返しと初丁表に出版広告、初丁裏に役人替名。

享保四年京万太夫座顔見世興行。三番続。八もんじや八左衛門板。

(7) **遊女胎内捜**　作者中山金蔵　榊山勘介

たきゑ（人物）	遊女胎内捜	ふ屋町通
大あたり（人物）		八文字屋
大和山	大和山六役大々あたり	八左衛門

半紙本一冊。原表紙、黄色無地。二一・七×一五・九。原題簽、表紙左肩に貼付（右図）。一五・七×四・七。本文十二行六丁半、他に見返しに役人替名。

享保五年京蛭子屋座二の替り興行（市村かつらの動向

から推定）。大和山甚左衛門六役（小わた弥市郎・ふぢや伊左衛門・万屋助六・山崎与次兵衛・江戸や辰五郎・なにはわん久）を勤め、山本小式部両面ぎつねを見せる。三番続。八文字屋八左衛門板。

(8) **十二調子恵子宝**

半紙本一冊。替表紙。二一・七×一六・〇。題簽欠。本文十二行六丁、他に見返しに出版広告、初丁表に役人替名。

享保五年京蛭子屋座顔見世興行。三番続。八もんじや八左衛門板。

(9) **大伴黒主花見車**

半紙本一冊。原表紙、黄土色無地。二二・〇×一五・七。題簽欠（ただし、表紙左肩に題簽、中央に脇方簽の貼付跡らしきものが残る）。本文十二行六丁、他に見返しに出版広告、初丁表に役人替名。

享保六年京万太夫座四の替り興行。座本沢村長十郎二役（ふか草少将・大伴くろぬし）を勤める。役人替名上段に「▲沢村長十良ほうび評判」を掲出。三番続。八もんじや八左衛門板。

(10) **小野篁千本□扇**

半紙本一冊。原表紙、黄土色無地。二一・八×一六・〇。題簽欠（ただし、表紙左肩に題簽、中央に脇方簽の貼付跡が残る）。本文十二行六丁、他に見返しに役人替名。裏表紙見返し上段に「鎌倉桐が谷桜曽我女時宗」、下段に「甲斐信玄信州川中嶋合戦」の出版広告。前者は、はじめに「江戸堺町中村勘三郎座狂言ノ躰□仕候」とあり、後に「当春仕リ候八重桐狂言前々の通り五巻のよみ本ニ仕り近日出し申候」享保七年寅七月吉日」とある。後者も「京大坂上るりかぶきニ仕り大当りゆへ前々の通り五巻のよみ本ニ仕り追付出し候間御買可被下候」八文字屋八左衛門」とある。

享保七年京万太夫座盆替り興行。三番続。八もんじや八左衛門板。